その他

第24回ICN（International congress of Nursing；国際看護師協会）4年毎大会に参加して

藤田佳子[1)]

[1)] 宇部フロンティア大学人間健康学部

キーワード；ICN，認知症患者，尊厳性

はじめに

第24回ICN4年毎大会が2009年21年6月29日（月）～7月3日（金）の5日間，南アフリカ共和国，ダーバンの地で開催された．この大会は，看護職を中心とした世界各国の看護実践者や研究者が，「Leading Change: Building Healthier Nations（変革をリードし，より健康な国づくりを）」というテーマをもとに諸国間で知識を共有し深める機会として開催され，全国127カ国約5600名が参加していた．それまでは，経済的事情などでICNに参加することが困難であったアフリカから約2000名に及ぶ多数の看護師が参集した．アフリカの看護師達からは，アフリカの現状やアフリカの看護教育に対する経済的支援の必要性を訴えた意見などが述べられ，アフリカ国内の経済的問題を考えさせられる学会となった．

近年，急速な高齢化率の上昇がみられている日本では，尊厳性を保ちながら高齢者をケアすることの必要性が強調されている．この問題は日本国内だけでなく，すでに西欧諸国においても取り組まれており，国際社会で高齢者問題や人権保証のあり方を捉え，考えていくことの重要性を示している．筆者は，河野保子教授他7名で実施した共同研究を本大会で発表する機会を得たので，その研究の概要と共に学術的交流の意義について報告する．

1．研究の概要

筆者は，第24回ICN 4年毎大会において「The dignity of dementia patients：Literature Review」というテーマで示説発表した．本研究は，平成20年度科学研究費補助金（基盤研究C）を受けて実施したものの一部で，目的は，認知症高齢者の尊厳性に関する研究がどの程度行われているのかを国内文献から明らかにすることである．方法は，医学中央雑誌Web版およびCiNiiのWeb版を用いて，1983年から2008年までの25年間のデータのうち，認知症，高齢者，尊厳性をキーワードとし検索した．その結果得られた73文献を分析し，次の内容を得た．

日本における認知症患者の尊厳性に関する研究は1994年から開始され，2000年を契機に研究は年々増加していた．論文の種類は，総説や資料が多く，研究報告や原著論文数はわずか14%（10／73文献）であった．著者の職種は，大学教員が32%，医師が22%，看護師が19%，介護福祉士が4%であり，認知症患者のケアに直接携わっている実践者の研究は少なかった．また，認知症患者の尊厳性に関する研究の概要は3分野に大別でき，それぞれの文献の占める割合は，1）生活の場における尊厳性（57%），2）制度・施策的尊厳性（29%），3）倫理的尊厳性（14%）であった．上記のとおり，日本における認知症患者の倫理的尊厳性に関する研究はまだ少なく，1）生活の場における尊厳性，2）制度・施策的尊厳性の研究においても，尊厳性の本質を述べている文献は少なかった．従って，これから日本では，倫理的尊厳性を踏まえた研究を行う必要性があることが示唆された．

2．学術的交流の意義

ICN大会は4年に1度開催され，臨床看護師，大学の教員，研究者，学生と看護に関わる職種が多様に交流できる場所である．発表されるテーマは「倫理／人権」「看護労働力と職場」「パンデミック／災害」「ク

リニカルケアと患者の安全」「看護教育と学習環境」「ケア体制」「科学技術・技術革新と情報科学」「リーダーシップ - マネジメント」など多岐にわたり，ICNの公用語である英語，フランス語，スペイン語などで発表されていた．

筆者らは「The dignity of dementia patients：Literature Review」というテーマで示説発表したが，これに対して「日本の高齢化率はどれくらい上昇しているのか」「日本の認知症患者の人数は具体的に何名なのか」「本当にこんなに急速に高齢化が進んでいるなんて信じられない」など多くの質問や意見があった（図1）．このように同じ関心をもつ研究者と国際的に意見交換を行うことで日本独自の現状を再認識すると共に，日本と同様に高齢化が進んでいる諸外国の研究者と認知症患者の尊厳を保ちながらケアすることの必要性について話し合うことができた．国際学会に参加することは，国際的視点で認知症患者の尊厳性について考える機会になると共に，新たな知見に巡り合う機会にもなりうることを実感した学会であった．

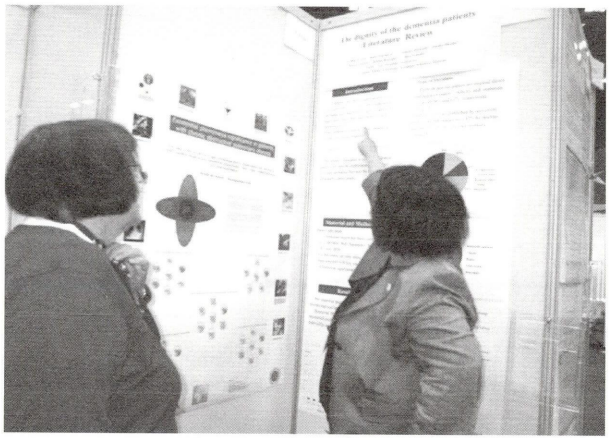

図1　交流の場面

3．ICNに参加して

南アフリカ共和国の都市ダーバンは，インド洋に面しており，素晴らしい眺望を臨むことができる地域であったが，人種差別の問題を色濃く残しており，経済的な格差がみられる社会であった．そのような状況下で，アフリカ全土から約2000人もの看護師が参集したICNの会議では，アフリカの看護師が，自らの国の現状（先進国への看護師の流出），看護師養成のための経済的支援の必要性（先進国に流出した看護師教育の費用を先進国が負担すること）など，英語で積極的に意見を述べていた．彼女達の発言から，私たちには想像しえない問題がアフリカの看護師制度にあり，日本の看護師の環境は恵まれていると改めて実感した．しかし，アフリカの看護師は，エネルギーに満ち溢れており，国際会議の場でも臆せず意見を述べている姿が多くみられた．このような機会に臨み，アフリカの看護師は先進国や看護上の制度に対して，意見を述べる機会が少なく，ICNなどの国際会議の場所でないと発言できない状況にあるのかもしれない，と私は考えてしまった．

ICNの閉会式では，アフリカの看護師達の団結力あるいは結束力の強さが示された．それは，会場のどこからともなく掛け声がかかり，アフリカの看護師全員が歌を歌いながら，同じリズムで誰一人間違えることなく同じダンスを踊り，大きな潮流となって会場全体へ広がっていった．アフリカの人種差別や経済的格差を忘れてしまうほど，皆が楽しく躍動し，パワフルで楽しい閉会式であった（図2）．

図2　アフリカの看護師によるダンス

おわりに

2009年には日本の高齢化率は22.8%となり，日本人の約4名のうち1名が高齢者になる超高齢化社会が到来した．欧米諸国の後を追うように医療状況が変化してゆく日本では，筆者は，独自の高齢者ケアを展開していく時期にさしかかっているのではないかと痛切に感じ，ぜひ本研究の結果を高齢者ケアに活かしていけるよう，今後も研究活動を発展させていきたいと考えている．

今回の発表は，平成20年度科学研究費補助金基盤研究C(課題番号20592528)（研究代表者：河野保子，研究課題名：「認知症患者の尊厳性に関する家族対処行動と支援システムの構築」）の助成を受けて行った．このような機会を与えてくださいました本大学および河野保子教授に深謝します．